

■研究資料

## にっぽんど真ん中祭りと愛知の祭り文化

松宮 朝  
加藤 歩<sup>1)</sup>

Domatsuri and The Culture in Aichi

Ashita MATSUMIYA  
Ayumi KATO

### 1. 都市の祭りの魅力

人はなぜ、祭りに魅力を感じるのだろうか。祭りに何を期待するのだろうか。

これには様々なこたえ方があるが、ひとつ、次のように言ってみることができるかもしれない。

そこが住み慣れた場所であれ、はじめて訪れる場所であれ、そこに生きる人たちのあり方を示すものとして祭りがある。どんなまちにも、そのまちに蓄積された歴史、生活、文化があり、祭りに参加する、祭りを見ることを通していつの間にかうねりに巻き込まれ、その一端に触れることができるのだと。

このような視点から愛知県の祭りに迫ってみることにしよう。

愛知県は、花祭りや、国府宮裸祭りなど、全国的にも著名な伝統的祭りが多いことで知られる<sup>2)</sup>。特に花祭りは早川孝太郎による民俗学の古典『花祭り』が書かれてから多くの学術的な注目を集めてきた<sup>3)</sup>。他にも、女性のシンボル、男性のシンボルをかたどった神輿を担いで練り歩く犬山市大県神社、小牧市田県神社の豊年祭や、西尾市熱池八幡社の「てんてこ祭り」など「奇祭」とされる祭りも多い<sup>4)</sup>。

このように祭りとは歴史や伝統のもとで語るべきものである。と同時に、常に新しい意味で解釈がなされ、新

しい生命が吹き込まれ、新しい文化を都市にもたらす点を見失ってはならないだろう。ネブタ祭りの調査研究を続けてきた田中重好は都市の祭りを、「都市に生活する人々が集合的に、街頭という都市の共同空間でおこなわれる自発的なパフォーマンスである」ととらえている。そして、祭りは都市に沈潜する心性を表現し、都市の社会構造を可視化させ、「伝統と革新、保守と創造とが交差する都市の祭りは、つねに新しい文化を創造」するといふのだ<sup>5)</sup>。

ここで祭りが「新しい文化を創造する」ことに注目してみよう。松平誠によれば、近年の都市の祭りは、特定の氏子による生活共同の絆を強めるような宗教的な色彩を浴びた「ハレの行事」として意味が薄まり、「伝統」にしばられない、イベントとしての意味が強まっているという。また、地域に固有の伝統的な祭りとされた阿波オドリやネブタのような祭りが全国各地に伝播していることに注意をうながしている<sup>6)</sup>。こうした祭りの伝播は、単に同じ祭りのかたちが伝わるだけでなく、伝えられた地域の文脈に沿った展開を見せるものだ。東京都杉並区高円寺の阿波踊りや、同じ高円寺の商店街を中心に展開される若者たちの様々な活動をもたらしたのである<sup>7)</sup>。

このような流れのもと、徳島の阿波踊りへの対抗として高知市で1954年から始まったよさこい鳴子踊りが、1992年に北海道YOSAKOIソーラン祭りへ、そして1999年には愛知県のにっぽんど真ん中祭りへとつな

がっていく。新しくわき起こった愛知の新しい祭りは、わたしたちにどのような世界を見せてくれるのだろうか。

## 2. にっぽんど真ん中祭り

まずは祭りの様子をつかむために、写真をご覧ください。

にっぽんど真ん中祭り（通称「どまつり」）は、毎年8月末、名古屋を中心に開催される祭りであり、1999年に第1回が開催され、2012年で14年目を迎えた。ここ数年は国内外からの観客も200万人を超え、愛知県の中でも有数の祭りに成長した<sup>9)</sup>。13回目のどまつりでは総勢2万人、200を超えるチームが愛知県名古屋市の中心部をはじめとした19の会場で踊りを披露した。踊りのチームは愛知県内だけでなく、全国、そして韓国やサイ

パンなど世界各国からの参加も増えている。各チームは4分半という制限時間の中で、積み重ねられた練習の成果を激しくぶつけていく。ステージや、パレードで繰り広げられるダイナミックな踊りは多くの人を惹きつけるものだ。また、単に観るだけでなく、「総踊り」という全員参加の踊りもあり、9,481名が参加した2010年の「総踊り」はギネス世界記録<sup>TM</sup>に認定されている。その中でもパレードでの踊りは審査をされ、選ばれたチームは最終日メインステージで行われるファイナルコンテストで踊りを披露、クライマックスを迎える。

このどまつりの基本ルールは、①チームの楽曲の中に地元の民謡の一節を取り入れる、②必ず手に鳴子を持って踊るという2つだけである。この極めてシンプルな2つの原則には深い意味が込められているのだが、まずは祭りが誕生してから現在までの経緯を見ていこう<sup>9)</sup>。

どまつりは、YOSAKOIソーラン祭りに参加要請を受



写真1 パレードでの演舞



写真2 パレードでの演舞



写真3 メインステージでの演舞

写真提供：にっぽんど真ん中祭り



写真4 フィナーレ





写真5 総踊り

けた名古屋「鯉」という踊りのチームのメンバーが、大学生主体の祭りが同年代の若者だけでなく幅広い層に共感してもらえるエネルギーに刺激を受け、「踊りで感動を伝えたい、名古屋でも作りたい」と、強い思いを抱くことからスタートした。水野氏を中心とするメンバーは東海地方の様々な祭りに参加させてもらいながら準備を整えていった。こうした地道な活動に対してしだいに協力者があられ、実を結んでいく。

代表の水野氏によると、この祭りの心臓であり血液は、なによりも大学生主体という点にあるという。多くの人たちがこの祭りに賛同してくれた一番の理由は、特定の企業や行政主催のものではなかったことであり、このような大学生の自発的活動が多く関係者を引き寄せた現象を、「大学生たちの生み出す真空地帯」と呼ぶ。この「真空地帯」という言葉からは、強烈な吸引力と同時に、何もない状態から新たな中身を作り出す創造性を感じることができる。

大学生主体で誕生した祭りであるが、予算規模が大きくなり、参加者、会場数が増えていくにつれて、大学生だけでできるのかという課題も浮上した。しかし、このような場合でも、大学生主体を重視するという点だけはこだわり、その活動をサポートする事務局体制という二本立ての組織作りで対応したのである（表1）。

さらに活動を進める上で課題となったのが、公益性の確保と桟敷席の設置である。リオのカーニバルに着想を得て桟敷席の設置を試みた際、名古屋市が700万円の公園使用料を請求する事態が生じた。これに対して、地域の財産、公共財を目指しているのに行政は何をもとに公益性を評価しているのか、どのように公益性を担保に

表1 にっぽんど真ん中祭り年表

年	事項
1996	名古屋学生チーム結成→「第5回YOSAKOIソーラン祭り」に参加
1999	「にっぽんど真ん中祭り」実行委員会第1回「にっぽんど真ん中祭り」開催
2001	「にっぽんど真ん中祭り普及振興会」設立
2002	どまつりキャラバン隊設立 観客100万人超え
2003	にっぽんど真ん中祭り組織委員会設立
2005	名古屋市と組織委員会が協働宣言に調印
2007	財団法人「にっぽんど真ん中祭り文化財団」の設立
2010	総踊り、9,481名がギネス世界記録TMに認定

きるのだろうか」と検討した結果、2007年には財団法人化を決断した。ここでは、期待される公益性にこたえるために、大学生主体の活動をサポートする基盤強化と、経済界、行政に公的立場での参画を求めた。こうした組織作りを通じて、若者たちの熱意、情熱、柔軟な発想という特性と、それを具現化する大人たちのエネルギーの融合がどまつりのエネルギーにつながっていったという。

次に、どまつりの最も大きな特徴である大学生主体という点について、学生の語りから見ていくことにしよう。

### 3. どまつりにかかわる

私（加藤）がにっぽんど真ん中祭り学生委員会を知ったのは大学3年生の5月、友人に誘われていったイベントでのことだ。そこで出会ったのは、どまつりを作っているという私と同じ大学生だった。学生で何か打ち込めることがしたい。そんなことを思っていた私は、生き生きと話す彼女らに魅かれ見学に行くことに。どまつり学生委員の活動拠点は中日ビル7階の一室にある。そこでどまつりと学生委員会の説明を受けて驚いた。どまつりを立ち上げたのは大学生だというのだ。そして今年のどまつりDVDを見た。どまつりのステージとそこで踊るたくさんの人々に圧倒され、魅了された。改めてこの祭りを大学生が作ったということに感動し、自分もそこに関わりたいと思った私は「入ります」と即決。この夏をどまつりに懸けようと思ったのである。

どまつりが好き。名古屋が好き。何かを仲間と作り上げたい。そんな学生が集まっているのがにっぽんど真ん中祭り学生委員会である。元は一人の学生の思いからで

きたどまつり。その想いを受け継ぎ、私たち学生委員会は久屋大通公園にあるメインステージを企画・運営している。私のように何も知らずに入ってきた人もいれば、チームとして踊っていた人、また当日ボランティアなどで関わったことのある人などいろいろな人がいる。しかし共通して言えるのは、もっともっと楽しい祭りを作ろうという想いである。主に、協賛・広報・審査・舞台・運営・MCの仕事があり、全体で話し合って方向性を決め、本祭が近付くにつれて班に分かれて行動する。私は舞台班—ステージの企画と台本の作成、そして当日のステージ運営—をすることになった。

私は入る時期がどまつりまで約2カ月、そして参加チームへのオリエンテーション間近であったために、とにかく準備に追われたが、本当ならばまず一番大きな仕事として協賛集めがある。あまり知られていないが、メインステージの運営資金は今でも学生委員会で集めた協賛金で賄われる。既存の協賛企業様へのお礼やお願いはもちろんのこと、より多くの人にどまつりをご理解、ご協力していただけるよう新規の企業へも積極的にアプローチしていく。お金をいただくというのは企業から期待していただくということで、本当に重要で責任のある活動だと実感している。

他の祭りのお手伝いというのも大きな意味のある活動である。参加チームとの交流だけではなく、どまつりはたくさんの人に支えられている。その恩返しだったり、また新たな縁をつないでいくためにも他の祭りへの参加は大切なことである。それは愛知県内に限らず、北海道のYOSAKOIソーラン祭りや国外でサイパンなども含まれる。そこでどまつりとは違った祭りへの発見もある。またなんととっても祭りの楽しさを味わえるというのも大きい。どまつりでは完全に裏方になってしまうので、他の祭りでは踊りを見たり、おいしいものを食べたり、踊ってみたり祭りを満喫できる。

そんなこんなで8月はあっという間にやってきた。はじめは週に一度だった集まりも、8月にはみんなでアパートを一室借りてほぼ泊まり込みで一晩中話し合ったり作業を行うことになる。私はというと、たくさん資料を作ったり集めたり、チームと連絡を取り合ったり、協賛企業や音響・照明等の協力会社の方と打ち合わせしたり……。こんなことができるんだ、と活動しながら圧

倒されればなしであった。またファイナルステージという最後の一番重要な台本を書かせて頂くことになったので、まず当日の様子がどんな感じなのか想像するところから入り、過去のどまつりの様子をビデオで研究したり、いろいろな人の話を聞いたり必死だった。どうしたら踊る人も見に来た人も楽しんでもらえるのか。どうしたら初めての人も巻き込めるような祭りに出来るのか。今までの想いや積み重ねを活かさなくてはいけない。そんなプレッシャーや、やることがたくさんあって泣きたくなる時もあった。MCの子と一緒に練習しながら雰囲気を考えたり、みんなに相談して時には白熱した議論も交わしながら、台本が完全に完成したのは2日前。

第13回につぼんど真ん中祭りは2011年8月26日から28日にかけてPower to Japanをテーマに、東北への支援をはじめ、どまつりから日本中へ元氣と笑顔を届けようというコンセプトで行われた。当日は次から次へとプログラムが進んでいき、あまり記憶にないというのが実のところ。ステージを見て感動する時間もなく、MCと音響や映像、照明の方々と最終の打ち合わせをし、前夜祭が始まる。始まってしまえば、後はうまく流れを止めないで最後まで走りぬくだけ。ステージの横で指示を出し、裏でステージの人の出し入れを調節しながら二日目の朝。ずっと舞台班みんなで練っていた学生企画で、「希望」の花言葉を持つ種を入れた、色とりどりの風船を飛ばした(写真6)。小さなハプニングはたくさんありながら、最後のファイナルステージ。ステージの前にはファイナルに残れなかったチームもいれば見に来た人、総踊りのために来た人、たまたま立ち寄った人も含めたくさんの人で埋まっていた。11チームの代表が固唾を飲んでステージで祈る中、曲が流れ、名古屋学生チーム「鯨」の名前が呼ばれる。ステージの上では鯨の代表者が抱き合いみんなが拍手で迎え、最後の総踊りへ。

私がどまつりを通して得たものは仲間と、そしてやる気だと思う。大学生になって、勉強して、なんとなくバイトしてお金をためて友達と遊んで。でもこの夏はどまつりしかなかった。今まででこんなに一つのことに拘って、みんなと考えると、形にしたことがあったのだろうか。どまつりが終わった時、すごく達成感があったけれど悔しいという思いもたくさんあった。あの時あしたら、こう出来ていたらよかった。最後まで最善のものにするべ



く悩みぬくこと、全力を尽くすことを私はどまつりで学んだ。だから第13回に後悔はない。ただ、もっといいもののできる。してみせる。そしてどまつりからつなが

る縁を広めていきたい。そう思ったから今年も私は学生委員会を続けることにした。祭りは楽しい。確かにどまつりは昔ながらの祭りではない。でも、こうしてたくさんの人を巻き込むことで祭りになっていくのだと思う。



写真6 サイパン独立記念パレード



写真7 当日の舞台班の様子



写真8 空に飛び立つ300個の「希望」

#### 4. どまつりが生み出す新しい文化のかたち

これまで見てきたように、どまつりは大学生主体による活動が大きく花開いたものであるが、その目標としている理念はさらに上をいくスケールだ。基本理念として、①それぞれの地域文化に誇りの持てるコミュニティづくりを推進する、②人類共有の世界文化を目指す、③世界の地域文化が集い、誰もが創る全員参加型の祭りを目指すという3点が掲げられている。

①それぞれの地域文化に誇りの持てるコミュニティづくりは、「踊りの曲の中に地元の民謡の一節を取り入れる」という基本ルールに示されている。これは北海道YOSAKOIソーラン祭りが必ずソーラン節を取り入れることを条件にしていることと対照的である。ここに込められた意図は、特定の地域性を持つ文化に合わせるのではなく、「それぞれの地元を持ち寄ってくださいというルール」であり、日本、そして世界各地の参加者がそれぞれの文化を持ち寄ることを重視するというものだ。

したがって、②人類共有の世界文化というもの、「一つの文化」に統合されるものではなく、「鳴子を持って踊る」という一点を共有した上で、各地域から持ち寄られた文化を共有していくという方向性を目指したものである。これは③世界の地域文化が集い、誰もが創る全員参加型の祭りという目標につながっていく。ここには、特定の地域の文化ではなく、「人類共有の世界文化」へと開かれる可能性を見てとることができるだろう。

では、こうした祭りのあり方は何を生み出してきたのか。

1つは、こうした地元の文化をどまつりに持ち寄り、共有することで、それぞれの地域、「地元」を新しい形で見直すきっかけになる点だ。これを端的に示すエピソードがある。当時大学生だった水野氏が、どまつりを立ち上げるにあたって出身地の瑞浪市長に直談判した時のエピソードだ。水野氏が活動への思いを伝え、助成のお願いをしたところ、まだ始まってもない祭りに対して補

助金の交付が決まった。それは、瑞浪市の祭りのマンネリ化の打破を期待されたことによるものだったが、「若者に期待されていることを実感させると、とてつもないエネルギーが出る」ことを震えるほどの気持ちで受けとめたという。そして、それまで「ふるさと」という意識を全く感じる事がなかった瑞浪市に対して、強烈な地元意識を持つようになったのだ。このように、どまつりへの参加を通して、それぞれの地域に対する思いが強まっていく可能性を指摘したい。

もう1点、どまつりを通して、それぞれの豊かな地域文化の多様性が反映されていくことが重要だ。東海地方はブラジルなど南米出身者が多く暮らす地域であり、こうした外国籍住民が多い地域の祭りでは、伝統的なブラジルの祭りである6月祭り（フェスタ・ジュニーナ）や、ブラジルの料理、踊りが取り入れられることが多い<sup>10)</sup>。こうした地域の一つ、東浦町では、約3人に1人がブラジル籍という石浜西小学校の子どもたちがブラジル人向け放送局と「日伯交流チーム」をつくり、どまつりのジュニア大会に出場している<sup>11)</sup>。それぞれの地域の多様な文化を新たな形で巻き込んでいくことに、どまつりの性格がよく示されているように思われる。

大学生主体によって作り続けられてきた愛知の新しい祭りである、どまつり。このどまつりを経験することを通して、愛知県という地域のありようを体感できるとと

もに、その新しい可能性をも展望することができるのだ。

## 注

- 1) 本章は1, 2, 4を松宮が, 3を加藤（愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科4年生）が分担執筆している。
- 2) 愛知県史編さん委員会編, 2011, 『愛知県史 民俗一』。
- 3) 黒柳晴夫, 2008, 「奥三河の花祭りと村落研究」日本村落研究会編『【年報】村落社会研究 43』農山漁村文化協会。
- 4) こうした祭りを「プリティで何だかトンマな感じ」=「とんまつり」と表現するみうらじゅんのまなざしは、伝統的でもすれば堅苦しく感じられがちな祭りに対して、新しい魅力を引き出そうとする試みとみることができる（みうらじゅん, 2000, 『とんまつり JAPAN』集英社。）。
- 5) 田中重好, 2007, 『共同性の地域社会学』ハーベスト社。
- 6) 松平誠, 2008, 『祭りのゆくえ』中央公論新社。
- 7) 2011年3月11日の東日本大震災後の反原発デモなど、若者主体の活動として脚光を浴びた高円寺の運動も、こうした波及効果の一つと考えることができる（松本哉, 2011, 『増補版 貧乏人の逆襲!』筑摩書房。）。
- 8) どまつり HP <http://www.domatsuri.com/>。
- 9) 以下の内容は、2011年11月15日に行われた、財団法人にっぽんど真ん中祭り文化財団専務理事水野孝一氏へのインタビューに基づいている。「いつも100%の力を出しているか」と自問し続けているという緊張感の中で、祭りに対する熱い思いを語っていただいた水野氏に感謝したい。
- 10) 松宮朝, 2012, 「共住文化——団地住民はいかに外国人を受け入れたのか?」山泰幸・足立重和編著『現代文化のフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房。
- 11) 『朝日新聞』2008年8月28日。